

ロシア民話としてのドストエフスキイ

第1章

七月はじめのとびきり暑い時分の夕暮れ時、一人の青年がS横町の住人から又借りしている自分の小部屋から通りへ出ると、なんだか思い切りの悪そうなのろのろした足取りでK橋の方へと向かった。

幸いにも彼は階段で住人たちと出くわさずにすんだ。彼の小部屋は背の高い五階建アパートの屋根裏にあたり、住処というよりは納戸のようであった。

この青年は別に臆病でおどおどしているわけではなく、むしろ正反対なくらいだったが、いつの頃からか、まるで心気症のようにイライラと張りつめた心理状態に陥っていた。だからいっそ、ネコのようにするりと階段を滑り降りて、誰にも見とがめられぬうちにこっそり姿を消すのがいちばんだったのだ。

街路はものすごい暑さに湿気と喧噪が加わり、至る所に石灰、材木、煉瓦、塵埃の山ができ、そして夏に特有の悪臭が立ちこめている。深い嫌悪の感情が、ふと青年の繊細な表情をかすめた。

ついでながら彼はすこぶる美男で、美しい黒い目、深い亜麻色の髪、背は中背より高く、痩せてすらりとしていた。だがやがて彼はなにやら深い物思いに、いやむしろ忘我の淵に落ち込んでしまったらしく、もはや周囲のことに気づきもせず、また気づきたくもないといった様子でどンドン歩き出した。

しかしちょうどこのとき、こんな時分にどこへ何しに行くのやら、凶体の大きな駄馬をつけた巨大な荷馬車で通りかかった一人の酔っぱらいが、追い越しざまにふと青年に向かって「おい、そのドイツシャッポ野郎！」と呼ばわり、片手で彼を示しながら大声で罵ったので、青年は突然はっと歩みを止め、発作的に自分の帽子をつかんだのだった。

それは丈が高く丸いツインメルマン帽というやつだったが、何せかなり使い込まれてすっかり黄ばみ、一面穴やシミだらけ、ひさしをもげて、全体がひどく不格好な角度で横にひしゃげていた。

心臓はどきどき神経はわなわなといった状態で、青年はいっぼうの壁が堀割に、もういっぼうの壁がP通りに面した、たいそう巨大な建物にやってきた。これは全体が小さな住宅に区分けされたアパートで、仕立屋、指物師、料理女、各種ドイツ人、身ひとつで稼ぐ独身令嬢等々、ありとあらゆる職業の者が住み着いていた。

そんな住人の誰とも出会わなかったことにたいそう満足しながら、青年はこっそりと門をくぐり抜けると、すぐに右手の階段に向かった。階段は暗くて狭い「裏階段」であったが、それは全部すでに調べて承知しており、しかもそうした状況の全てが彼には気に入っていた。

ベルはちりちりと弱々しい音を響かせた。銅ではなくてブリキでできているようだ。こうしたアパートのこのような小部屋には、おおむねこんなベルがついているものだ。彼

はすでにこのベルの音を忘れていたのだが、いまこの特別な響きが、あたかも彼に何かを思い起こさせ、ありありと目の前に示してみせたような具合だった……。

青年は敷居をまたいで、衝立で仕切られた暗い玄関口に入った。衝立の向こうは小さな台所である。床には刈り取られたばかりのみずみずしい、香り高い草がまかれ、窓は開け放たれてすがすがしい軽やかな大気が部屋に入り込み、窓の下では鳥たちがさえずり、そして中央の白い繻子のクロスでくるまれたテーブルには、棺が載っていた。棺は純白のナポリ絹で覆われ、白く分厚い襷飾りが施されている。それを四方八方から花輪が囲んでいた。花に包まれて棺の中に横たわるのは純白のチュールのドレスを着た娘で、まるで大理石でできたような両手の指を組んで、しっかりと胸に引き寄せている。だが彼女の乱れ髪、明るいブロンドの髪は濡れていた。薔薇の冠が頭に巻き付いている。少女の顔の厳しい、すでに硬直したプロフィールも、同じく大理石の彫刻のようだったが、その病的な唇に浮かんだ笑みは、なにかしら子供らしくない、果てしない悲しみと深い哀訴に満ちているのだった。

それは年の頃六十ばかりの、痩せこけてひどく小柄な老婆で、鋭い邪眼に小さくとがった鼻、髪はむき出しだった。ほとんど白髪のない淡い金髪には油が塗られている。鶏の脚にも似た細くて長い首には何かフランネルの切れが巻かれ、肩にはこの熱暑にもかかわらず、一面にすり切れて黄ばみきった毛の袖無しが羽織られている。

彼は自分の動揺を言葉でも叫びでも表現することができなかった。心を圧迫して朦朧とさせる果てしのない嫌悪感がいまや極度に達し、あまりにも明瞭な形を取ったので、どうしても自分の悲哀から逃れるすべが分からなかった。そうして道行く人に気づきもせず何度もぶつかりながら、酔っぱらいのように歩道を歩いたあげく、もう次の通りに来てからはっと我に返った。

彼の内では何かしら新しい出来事が起こったような具合で、しかもある種の人恋しさが感じられるのだった。ふとあたりを見回すと彼は一軒の酒場のすぐそばに立っていて、歩道からそのまま階段を下って地階に出れば、そこがもう店の入り口だった。この時刻には酒場の客もまばらだった。ビールを前に座っているほろ酔い加減の町人風の男が一人。太って大柄なその連れは立襟の上着を着て灰色の顎髭を生やしているが、こちらはだいぶ出来上がっているようで、ベンチ式の椅子でうとうとしながら、時々ふと寝ぼけ半分のように両手を広げて指を鳴らし始め、椅子に座ったまま上半身だけぴょんぴょんと跳ねてみせている。そしてその際になにやら他愛ない歌を、一所懸命歌詞を思い出しながら歌うのだった。

まるまる一年、かあちゃんを可愛がったよ
まあーまるまる一年、かあーちゃんを可愛がったよ……

あるいはまた、不意に眠りから覚めてこう続けるのだった

お役所通りを歩いていたら

むかしの女を見つけたよ……

店にはもう一人客がいて、見たところ退職官吏という風情だった。こちらは酒の小瓶を前に一人ぼつんと座り、時々ちびりと呑んではあたりを見回していた。それはすでに五十は越えたと見える男で、中背でがっしりした体躯、白髪頭に大きな禿ができていて、むくんで黄色い、というより緑っぽい顔に腫れてふくらんだ脛、そしてその下にはまるで亀裂のように細いが熱のこもった赤い目が輝いているのだった。男はいらいらと落ち着かぬ様子で髪をかきむしり、そして時折やるせなげにこぼれた酒でべとべとするテーブルに肘を突いては、両手で頭を支えるのだった。

とうとう男は青年をまっすぐに見据えると、大声ではっきりと言った。

「そこのお方、失礼ながらひとつ折り入ってお話し申し上げたい儀があるのですが、お相手いただけないでしょうか？ いやなに年の功というやつで、御風体こそ地味でいらっしゃるが、きっと学問がおありの方とお見受けした次第で。小生、平素から学問に、真情の伴った学問に敬意を払っている者でありますし、それに自分の勤めも学術の方面なので。メンデレーエフと、まあそんな姓でして、教授であります。ところで、お勤めをしておられるのですか？」

「いや、勉学中の身です……」青年はこんなにも開けっぴろげに、正面から話しかけられたことにいささか面食らって答えた。

「ということは、学生さんか、もしくは元学生さんでいらっしゃるわけだ」相手は声を高くした。「やっぱりね。いやはや失礼ながら、亀の甲より年の功、思った通りですわ」

「ときに学生さん」と彼はほとんど勝ち誇ったような口調で続けた。「『知識余りて悲哀いや増す』といひますな。こういうのも存じておりますよ——『学は一生の業、さりとていくら学べど死ぬときや阿呆』ってね。それから『知は力なり』などともいひますな。たしかに知識というものは、おおむねそういうものなのかも知れません。つまりいろんな知識を得ても、持って生まれた感情の高潔さというものを、まだなくさないでいられるでしょう。しかし分別となると、誰一人そんなものが保てなくなるのです。分別のある人間はもう人間社会から棒で叩き出されるどころか、箒で掃き出されてしまいますよ。つまり、ひとしお骨身にしみるようにね。でもそれが当然で、分別があるとなるとまず自分で自分を軽蔑しようという気になりますからな。そこでつまり飲み始めるというわけで！ そこでもう一つ、いわば物好き半分におたずねさせていただきますが、小生の『表』をご存じですか？」

「いいえ、あいにく」青年は答えた。「それはどのようなものでしょう？」

「表のことですか？ いや、まったく下らぬ代物です。簡単明瞭、説明するまでもありません。ところで分別の話ですが……娘婿のシューラ¹というのがいましてね。いかにも賢そうな顔をして、激しい気性、誇りが高く、一本気です。学歴もじっさい高いほうで、それもなかなかいい学問をしてきたようです。つまりこれも若くして分別を身につけた口です。『ソフィアは天上のものにて人知では計れず、紺碧にて人知から隠されてある。た

¹ アレクサンドルの愛称。酔漢が化学者メンデレーエフを名乗っているの、娘婿のシューラとは詩人アレクサンドル・ブロークにあたる。

だまれにセラピム（六翼天使）が世の選ばれた者たちに神秘の夢をもたらすのみ』とね。こんな詩もあります——『われは暗き聖堂へとはいり、慎ましき儀式を行う。そこでわれは美しき淑女を待つ、赤い火影のたゆたいの中で』。気高い詩です。ただ学生さん、ここでひとつ小生の個人的な質問をさせていただきたい。はたして清き乙女がこのような仕打ちをどれほどまで我慢できるものでしょうか？ 娘は手をもみしだきながら部屋から部屋へと歩き回っております。そうしてその頬には赤い斑点が出てきたのです……」

この人物の話はどうやら酒場のみんなの関心——といってもにぶい関心だが——を呼んだようだ。カウンターの向こうの給仕たちがヒヒヒと下品な笑い声を立てた。亭主の方はどうやらこの「道化者」の話聞いてやろうと、わざわざ上の部屋から下りてきて、けだるそうな、しかしもったいぶった欠伸をしてみせながら、少し離れたところに腰を下ろした。明らかにメンデレーエフは以前からこの店で有名だったのだ。

「道化の旦那！」亭主は大声で言った。「もしも学術の方面とやらのお方なら、なんで仕事につかねえんで、どうしてお勤めをしねえんでさあ？」

「なぜ小生が勤めをしないかというのですな」メンデレーエフは亭主の言葉を引き取ると、まるで青年がこの問いを発したかのように、彼の方だけを向いて答えた。「何で勤めをしないかという……」メンデレーエフは急に声が出なくなったかのように黙り込んでしまった。それから不意にせかせかと一杯注ぐと、ぐっと飲み干して喉を鳴らした。

「つまりあのとき以来ですな」しばしの沈黙の後彼は言葉を続けた。「あれ以来で……。どうです、学生さん、こういう経験がおありですか……。そう、まったく望みのない状況に陥るといふ経験が？」

「あるにはありますが……。でもどんな風に望みがないんで？」

「お話ししましょう。ある時、小生は不遜な野心を起こして、知恵の神殿のまっただ中に入り込んでやろうと思ひ立ち、そうして成年にも達しないうちに、もう完全な傲慢の虜となってしまったのです。その後、堅忍不拔の努力を続けました。しかも一年や二年ではなく何十年も。でも学生さんですから説明の要もないでしょう。それに背負い込んだ仕事が大きすぎて、説明といっても難しい——なにしろ、ありとあらゆる物質が、それぞれ神の定めた唯一の位置に納まるような、そんな表を作るという仕事ですから。傲慢でした。とてつもなく傲慢でありました。小生の不幸がいかばかりのものになったか、ご想像いただけるでしょう。しかもその間中ずっと、小生は真面目一筋で仕事を続け、こいつには（と彼は指でウオッカの小瓶をつついた）触れもしませんでした。恥を知っていたからです。そうして小生は知恵を獲得した。獲得して、そして失ったのです。おわかりかな？ ただしそれも自業自得、失うべくして失ったのです。なぜならあんな表など、愚劣の極みではありませんか……。ひとつご覧ください……」

メンデレーエフは黄色っぽい色のボタンがかなりとんでしまっている古いぼろぼろのフロック・コートの懐から、どうやらどこかがかすめてきたような窓の掛け錠を取り出すと、話し相手の方に突きだした。

「どうか持っていてください……」メンデレーエフはまたもや興奮のあまり声をとぎれさせた。するとそこへ、もう十分にできあがった酔っぱらいの一团が通りから入ってきて、入り口のところで流しの手風琴の音と「田舎屋敷」という猥雑な歌を歌う七才

ぐらいの少年の裏声が響いた。あたりが急に騒がしくなる。亭主と給仕たちは新来の客の対応を始めた。だがメンデレーエフは新しい客たちには目もくれず、話の先を続けようとした。もはやかなり酔いが回ってきたようだが、どうやら酔えば酔うほど饒舌になる様子であった。近い過去の成功の思い出が彼を元気づけたようで、なんだか顔まで輝いて見える。若者はじっと耳を傾けた。

「それから、およそ五週間ほど前のこと……そう、小生はまるで神様の国に移り住んだようなあんばいでした。はっきりと夢の中で御声を聞いたのです。『さてメンデレーエフよ、汝が余の期待を裏切らなかつたからには……』とね。さてそこで、ひとつこの品物をご覧くださいませかな。いいですか学生さん、ひょっとしてあなたも他の連中同様、これを冗談ごとと思われるかも知れないが、小生にとっては冗談じゃありません。これはあなた、真鍮です。そしてよろしいかな、小生の表に真鍮の場所というのは用意されておりません。真鍮というのは、学生さん、純粋な物質ではなくて合金ですから……。しかし果たしてこれは何を意味するのでしょうか？ 真鍮は存在しないとでもいうのでしょうか？ しかしほら、こんなにしっかりと存在しているものが、どうして存在しないなどと言えるのか。それが学問的純粋さというものだと学生さんなら言うかも知れない。しかし、ご承知ですか、そういう純粋さがいったい何を意味するかということですか？ さていかがですか、こういう小生みたいな人間を、誰か哀れんでくれる人がいるのでしょうか？ ええ？ 学生さん、あなたは小生を哀れんと思いませんか？ 思いませんか？ さあどうですか、イエスですかノーですか？ へっへっへっへっ！」

彼は酒を注ごうとしたが、もう酒はない。小瓶は空っぽだった。

「いったいどうしてお前さんを哀れまにゃならんのだね？」いつの間にか二人の近くに戻っていた亭主が声高に言う。

どっと笑い声が上がり、悪態をつく者までいた。話を聞いていた者も聞いていなかった者も、ただもう教授の姿を見るだけで、笑ったり罵ったりするのであった。

「哀れむ？ どうして小生を哀れまにゃならんのか！」メンデレーエフは突然立ち上がって片手を前に伸ばすと大音声をあげたが、その様子にはまるでこのきっかけを待ちわびていたかのような気合いがみなぎっていた。「どうして哀れまにゃならんかとお前は聞くのだな？ そうさ、小生をあわれむ理由などない！ 哀れむどころか、小生なんかはりつけに、十字架の上ではりつけにするくらいがちょうどいい……。どうだ亭主、お前の売ったこの小瓶の酒が小生の喉に甘かったと思うか？ いや悲しみを、悲しみをこそ小生はこの小瓶の底に求めたのだ。悲しみとそして涙を味わい、そして手に入れたのだ。だがもし小生のような者でも哀れんでくれる人がいるとしたら、それは諸人を哀れみ、諸人を理解したあのお方だ。このお方こそ唯一なる存在であり裁き手である……。全ての者を裁き、許しなざる……。善人も悪人も、賢き者もへりくだる者も……。そしてわれわれに声をかけてくださる。『さあお前たち、出て参れ。酔っぱらいたちよ、出て参れ。弱き者たちよ、出て参れ。恥知らずたちよ、出て参れ』とな。そこでわれわれはみな臆面もなく出て行って並ぶ。すると賢者たちがこう言うのだ。『主よ、何故にこのような者たちを受け入れられるのですか？』すると主は言われる。『賢者たちよ、この者等を受け入れるのは、彼らの誰一人として自らがそれにふさわしいとは思っておらぬからである……。』そうして御手をわれらに差し延べられ、われらは平伏し……。そうして泣きくずれ……。そうして

全てを悟る！ そのときこそ全てを悟るのだ………そしてみんなも分かってくれるだろう………。おお、主よ、御国を来たませたまえ！」

こう言うと彼は精も根も尽きたようにがっくりと長椅子に腰を落とし、誰の顔も見ようとせず、あたかも周囲のことを忘れ果てたかのように深い物思いに沈んだ。彼の演説は幾ばくかの効果をもたらしたようで、しばし沈黙が支配したが、やがて最前のような笑い声と罵言がわき起こった。

「ひと理屈こねたじゃねえか！」

「たいしたほら吹きだ！」

「役人めが！」云々云々。

「さあ、出ましょう」メンデレーエフは突然頭を上げてそう言った。「ひとつ送ってください……。コーゼリのアパートの内庭の方です」

青年はもうさっきから店を出たいと思っていたところで、相手を送っていくのは望むところだった。メンデレーエフは口よりも足の方にはるかに酔いが回っていて、ぐったりともたれかかってくる。距離は二百か三百歩というところだった。だが家に近づくとつれて、メンデレーエフは次第に混乱と恐怖の虜になっていった。

「小生がいま恐れているのは純粹さではありません」彼は不安げにつぶやくのだった。「別物です。ほら、ご存じでしょうか、アルミニウムという元素がありますな。世間でアルミで通っているやつです。ところで学生さん、いままでに誰かこのアルミニウムというものを手で持ったことのある者がいるでしょうか？ いいえ、ありませんし、そもそもあり得ないのです！ なぜならばアルミニウムは酸素の作用、もしくは単に空気的作用によって直ちに酸化してしまうという性質がありますから、貴兄の指がアルミに触れるという可能性は寸部たりともないのです。それがどうしたとあなたはおっしゃるでしょう。まことにもっともで、どうということもありません。ただ学生さん、問題はこういうことなのです——つまり、まるで蠟のような、主の御像にお供えする蠟のような心優しき人がいて、夢の中では何でもうまくゆき、またその夢ときたらこの上もなく高潔な夢なのですが、そうした夢が実現されようとしたとたん、このわが国の大気の中では、ご承知の通り酸化してしまうのです。横行するのは野蛮な自然だけで、アルミだろうが何だろうが、純粹なるものはみんな通せんぼを食らってしまうのです」

二人は内庭に入り、四階へと向かった。階段は上に行くほど暗くなった。すでに十一時で、この季節のペテルブルグに本当の夜は無いとはいえ、階段の上は暗かった。

階段の突き当たり、一番上階にある小さな煤けたドアは開けっ放しだった。燃えさしのろうそくが奥行き十歩ばかりのひどく貧しげな部屋を照らしており、玄関口からその全体が見渡せた。部屋の中には二脚きの椅子とぼろぼろになった蠟布張りのソファ、その前に置かれた古い松材のテーブルがあるだけで、テーブルは白木のままカヴァーも何もされていなかった。テーブルの端には鉄製の燭台の上で獣脂ろうそくが燃え尽きようとしている。どうやらメンデレーエフは独立した一室だけを借りて住んでいるようだった。他の部屋に通じるドアは細目に開けられていて、その奥はがやがやと騒がしく、高笑いの声も聞こえる。どうやらカードをしながら茶を飲んでいるようで、時折ひどく下品な言葉まで

が耳に飛び込んできた。

メンデレーエフは青年を前に押し出すと、自分はまだテーブルまでも行き着かぬうちに、燃えさしの前に膝をついた。連れが当惑しているのに気づくと、彼はそちらに顔を向けて言った。「これでいいんです……。これが我が家です……。小生が怖いのは……。怖いのはあの目です……。あのほっぺたの赤い斑点も怖い……。子供の泣き声も怖い……。殴られるのは平気だ。それからもう一つ」と彼は玄関の方へ戻ろうとする青年の機先を制するように言った。「指輪を作るなら、私の表の中でOの文字で終わる元素²だけで作ることです」

青年は一言も口をきかずに、急いで退散しようと思った。おまけに奥へ通じるドアが開け放たれて、そこから何人かの野次馬がこちらをのぞいていたのだ。口つきタバコやパイプをくわえたり丸帽をかぶったりして、ニヤニヤ笑いを浮かべた凶々しそうな顔が、あちこちに突き出されている。寝間着姿の者もいれば、すっかり前をはだけてしどけない下着姿を曝している者もあり、中にはカードを手に持ったままの者までいた。青年は奥へのドアめがけて突進した。そして隣室に入ったとたん、はっと我に返ってその場に立ちつくした。それはちょうど、何で自分はこんなところに入り込んだのかと考えているかのようであった。

部屋の中は蒸し暑かったが、窓は開けられていなかった。階段からは悪臭が、周囲の部屋からはドアの隙間越しにタバコの煙の波が押し寄せてくる。一番末の六歳ぐらいの女の子が、床に座って背中を丸め、ソファに頭を突っ込むようにして眠っていた。一歳ほど年上の男の子は、隅っこで全身を震わせながら泣いている。おそらく折檻されたばかりなのだ。マッチ棒みたいに痩せて背が高い十一歳格好の長女は、穴あきだらけのぼろシャツ一枚の上に、たぶん二年も前に仕立ててもらったのだろう、いまでは膝までも届かない古風なドラデダム織りのマントをむき出しの肩に羽織って、隅っこの弟のそばに立ち、ひょろ長くてマッチ棒のように干からびた片手でその首を抱えてやっていた。彼女はどうか弟をなだめようとしてなにやらささやきかけ、なんとかすすり泣きをやめさせようと懸命につとめている様子だったが、同時に並はずれて大きな目を見開いて、おそろおそろ闖入者の様子をうかがっていた。ただでさえ大きなその目は、痩せて怯えた小さな顔のせいでますます大きく見えるのだった。

第2章

その翌日、彼は不安な眠りの果てにもう遅くなってから目覚めたが、眠りは元気を回復させてはくれなかった。不機嫌で苛ついた、とげとげしい気分で目を覚ますと、彼は憎しみの眼差しで自分の小部屋を眺めた。それは奥行きが六歩分ほどのちっぽけな檻のような部屋で、埃まみれの黄色っぽい壁紙があちこち剥がれかかっているのが何ともみすぼらしく、極端に天井が低いせいでちょっとでも背の高い人間には居心地がわるく、いまにも頭を天井にぶつけはせぬかと絶えず心配していなくてはならない。置いてある家具も部屋に見合っていた。だいがたの来た古椅子が三脚。隅っこには色塗りのテーブルがあって、何冊かのノートや本が載っている（埃のつもり具合からして、もう久しく誰の手もそれら

² 金(zoloto)、銀(serebro)等を指す。

に触れていないのが明らかだった)。そして最後に、不格好な大きなソファがほとんど片側の壁一面と部屋の横幅の半分を占領していたが、これももと更紗張りだったのが、今では見る影もなかった。ソファの前には小卓が置かれていた。

幸いにも彼は階段で住人たちと出くわさずにすんだ。彼の小部屋は背の高い五階建アパートの屋根裏にあたっていた。青年は彼らの誰とも出くわさなかったことにおおいに満足して、こっそり通りへと抜け出した。

街路はものすごい暑さに湿気と喧噪が加わり、至る所に石灰、材木、煉瓦、塵埃の山ができ、そして夏に特有の悪臭が立ちこめていた。町のこの地区にとりわけたくさん集まっている酒場から、たまらない悪臭がただよい、平日だというのにひっきりなしに出くわす酔っぱらいたちの姿が、忌まわしくも陰鬱な色調をいやが上にも深めていた。深い嫌悪の感情が、ふと青年の繊細な表情をかすめた。だがやがて彼はなにやら深い物思いに、いやむしろ忘我の淵に落ち込んでしまったらしく、もはや周囲のことに気づきもせず、また気づきたくもないといった様子でどんどん歩き出した。ただときおり口の中で何かぶつぶつとつぶやいていたが、これは彼がさっき自分で認めた独語癖のせいだった。いまこのとき、彼は自分の思考が時々乱れ、体もひどく弱っていることを、われながら認めざるを得なかった。もうまる一日以上ほとんど何も食べていないのである。

道のりは長くはなかった。彼は自分のアパートの門から何歩あるかさえ心得ていた——きっかり七三〇歩である。いつだったか空想の赴くままに、実際に測ってみたのだ。そのころは自分でもまだそうした自分の空想が信じられず、ただその荒唐無稽ながら魅惑的な大胆さに、みずから心をかき立てられていただけだった。あれから一月たった今では、彼の見方もすでに変わりはじめていて、相変わらず自分の無力さや優柔不断ぶりをぶつぶつと自嘲しながらも、何か否応なくといった感じで、例の「荒唐無稽な」夢をひとつの「計画」と見なすことになれてしまったのだ。もっともいまだに自分で自分を信じてはいなかったのだが。心臓はどきどき神経はわなわなといった状態で、青年はいっぽうの壁が堀割に、もういっぽうの壁がP通りに面した、たいそう巨大な建物にやってきた。二つの門と二つの内庭は、いずれも出入りの人通りが絶えなかった。階段は暗くて狭い「裏階段」であったが、それは全部すでに調べて承知しており、しかもそうした状況の全てが彼には気に入っていた。ここで彼は、兵隊上がりの運送屋たちが一軒の住居から家具を運び出しているのに道をふさがれた。「俺はすごく蒼い顔をしているんじゃないか？」そんな考えが浮かんだ。「ひどくどぎまぎしていやしないか？ あの女は疑り深いからな……。少し待った方が良いか……。せめて心臓のどきどきが静まるまで」だが動悸はおさまらない。それどころか、まるでわざとのようにどんどんどん鼓動が強まってくるのだった……。彼はこらえきれなくなって、ゆっくりと呼び鈴に手を伸ばし、鳴らした。ベルはちりちりと弱々しい音を響かせた。銅ではなくてブリキでできているようだ。彼はまたぎくりとした。今回はあまりに神経が弱っていたのだ。

少ししてドアが細めに開けられた。青年は敷居をまたいで、衝立で仕切られた暗い玄関口に入った。衝立の向こうは小さな台所である。床には刈り取られたばかりのみずみずしい、香り高い草がまかれ、窓は開け放たれてすがすがしい軽やかな大気が部屋に入り込んでいる。そして中央の白い繻子のクロスでくるまれたテーブルには、クリスタルガラ

スの棺が載っていた。

棺は四方八方から花輪で囲まれていた。花に包まれて棺の中に横たわるのは一人の娘だった。古いネグリジェのひとつを身にまとった娘は、入ってきた者に背中を向ける格好で横向きに寝ていた。軽い布地越しに透けて見えるその体とむき出しの手足が、短いジグザグを描いている。彼女は頭にまくらを敷いていて、巻き毛は乱れ、青白い光の縞が脊椎の上部を横切っていた。

誰かが咳をした。老婆が黙って彼の前に立ち、もの問いたげに見つめている。それは年の頃六十ばかりの、痩せこけてひどく小柄な老婆で、鋭い邪眼に小さくとがった鼻、髪はむき出しだった。

「この間来た者ですが」青年はそそくさとつぶやき、愛想良くする必要があることを思い出してぺこりと頭を下げた。

「覚えています。よく覚えていますよ」老婆ははっきりとした口調で言ったが、相変わらずもの問いたげな目をじっと彼の顔に注いでいた。

「それで……また同じお願いなのですが……」

老婆は考え込んだようにしばし沈黙していたが、それから脇に身を寄せると、棺の方を示して客を通しながら言った。

「どうぞお入りください」

かたわらに何かの本が置かれていた。手にとって見てみると、ロシア語版の新約聖書だった。誰かのお下がりの古い革装の本だ。

「これはどこで手に入れたの？」彼は老婆に向かって問いかけた。

彼女はあいかわらず彼から三歩のところにとたずんでいた。

「人が持ってきたんですよ」彼女は不承不承といった様子で、彼の方も見ずに答えた。

「あの娘の話はどこでしたっけ？」彼は不意に尋ねた。

老婆はじっと下を見つめたまま答えようとしない。彼女は棺に対して横向き加減に立っていた。

「娘が生き返る話はどこ？ さがして欲しいんだけど」

彼女は横目で彼を見やった。

「そんな所じゃありませんよ……。マルコによる福音書です……」彼に近寄ろうともせず、彼女は厳しい声でささやいた。

「見つけて、読んで欲しいんだ」そう言うと彼は腰を下ろし、ひじを突いて片手を頭で支えると（ママ）、気難しげな顔で娘をじっと見つめて、聞く体制に入った。

老婆はいかにも気が進まぬ様子で棺に歩み寄り、それでも本を手にとった。

「読んで！」突然彼は執拗ないらいらした声で叫んだ。

老婆は本を開いて目的の箇所を探し出した。その手は震え、声にも力が入らない。二度も読みかけたのに、なかなか最初の一語が発声できなかった。

「イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。『お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう』イエスはその話をそばで聞いて、『恐れることはない。ただ信じなさい』と会堂長に言われた。そして、ペトロ、ヤ

コブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、家の中に入り、人々に言われた。『なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ』人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。そして、子供の手を取って、『タリタ、クム』と言われた。これは、『少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい』という意味である。少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。イエスはこのことをだれにも知らせないようにと厳しく命じ、また、食べ物少女に与えるようにと言われた」³

その先は彼女は読まず、本を閉じてさっと椅子から立ち上がった。

「娘の話はこれで全部です」とぎれとぎれの厳しい口調でそうつぶやくと、彼の方へ目を上げるのがためられるかのように、あるいはそれを恥じるかのように、顔を背けてじっと立ちつくしていた。

青年は棺に歩み寄った。彼女のきれいな横顔、少し開き気味の唇、日の光で暖まった髪が、彼から十五センチほどの所にあった。彼は突然はっきりと理解した——彼女の首に、あるいは口の端にキスをして何の咎めもうけないだろう、そして彼女は彼がそうするのを許すだろう。彼がどうしてそれを理解したのか、説明するのは不可能だ。ひょっとしたら動物的な感覚によって、彼女の呼吸のリズムのごく微妙な変化を感知したのかも知れない。だが遅かった！ 街路から恐ろしい、絶望的な慟哭の声が彼の所まではっきりと聞こえてきたのだ。

最初の一瞬間、彼は自分は気が狂うのだと思った。ひどい寒気が全身を包んだ。あっというまに歯の根も合わぬほどの悪寒が走り、全身がぼうっとしてきた。どこか遠くの下の方、たぶん門のあたりで、大声でわめき合う二人の人物の声がする。喧嘩したりのりり合ったりしている声だ。ついに全てが、切って落としたようにしんと静まった。彼はもう階段に踏み出そうとしていたが、その時誰かの足音が聞こえてきた。

その足音はかなり遠く、まだ階段の上がり口あたりから聞こえてくるものだったが、彼が後々までたいそうはっきりと記憶しているところでは、最初の響きを聞いたとたん、それがここへ、この四階の老婆の部屋へ向かう足音だと、彼は推測したのであった。それは重々しい、規則正しい、ゆったりとした足音だった。ほらもうあいつは一階を通り過ぎた。ほらもっと上に上がってくる。どんどん足音が大きくなってきた！ おや、もう三階にさしかかったぞ。ここへ向かっているのか？ そのとき彼はふと、自分がまるで金縛りにあっているような気がした。ちょうど夢の中で敵が間近まで追いかけてきて、今にも殺されそうだというのに、こちらはその場に根が生えたようになって、手さえ動かさないというあれだ。

客は何度かぜいぜいと重い息をついている。「きっと太った大男だ」彼は考えた。実際、何もかも全部夢の中のようにであった。客は呼び鈴の紐をつかんで強くひいた。

ブリキのベルがちりちりと鳴ったとたん、あたかも誰かが部屋の中でびくりと動いた

³ 『マルコによる福音書』 5:34-43 (日本聖書教会、新共同訳)

ような気がした。何秒か、彼は真剣に耳を澄ませさえした。見知らぬ客はもう一度呼び鈴を鳴らしてしばらく待っていたが、とつぜん業を煮やしたらしく、力任せにドアの取っ手を引っ張り始めた。青年は慄然として錠の掛けがねが受け軸の中で踊るのを見つめながら、今にも錠前全体がはじけとんでしまうだろうと、にぶい恐怖のうちに予期していた。「えい、ばかばかしい！」外の男は急にそう叫んだかとおもうと、ついに堪忍袋の尾を切らして、階段にブーツの音を響かせながら、せわしげな足取りで下りていった。やがて足音が静まった。

階段には誰もいなかった。門の所にも。彼は素早く門をくぐり抜けると、通りを左へ曲がった。

神経性のふるえがなにか熱病のようなものになり、悪寒さえ感じられてきたので、うだるような暑さの中で彼は寒気を味わっていた。一種の内的な必要性から、彼は自分に強いるようにして、何か格別の気晴らしを求める人のように、目に触れる全てに注意を向けようとしてみたが、それはいっこうにうまくいかず、ひっきりなしに物思いに落ち込んでいくのであった。そうしてまた愕然として頭を上げ、あたりを見回すのだが、その時にはもう自分が先ほどまで何を考えていたのかも、そしてどこを通過してきたのかも、すぐに忘れていたのであった。

後になってこの頃のことを、この何日かの間に自分の身に起こった出来事の全てを、一分刻みに一点一点詳しく思い起こしてみたとき、あるひとつの事情が彼を驚かすのであった。たしかにそのこと自体は格別異常なことではないのだが、後になってみるとなにやら運命の配剤だったような気がしてならなかった。

端的に言えば、へとへとに疲れ果てていたあのときの自分が、そのまま最短距離を通過してまっすぐに家へ帰るに越したことはなさそうなものを、なぜわざわざまったく無駄な回り道に他ならぬセンナヤ広場などを通して帰ったのか——彼はこの点がどうしても納得がいかず、自分でも説明しかねているのだった。いったいどうして——そう彼はたえず自問するのだった——いったいどうしてあんなに重大な、俺にとってこの上なく決定的な、しかもきわめて偶然的な邂逅が、センナヤ広場などという（およそ俺が通る必要もない）場所で、ちょうどあの時、つまり俺の人生のあの時間とあの瞬間に、しかもこちらの気分や状況にぴったりのタイミングで生じたのだろうか。だってあの状況下で起こったからこそ、あの邂逅は俺の運命に決定的で最終的な作用を果たし得たのであって、他のタイミングではだめだったのだから。あれはまるで、わざと俺を待ち伏せしていたみたいではないか。

彼がセンナヤ広場にさしかかったのはかれこれ九時頃だった。テーブルやら木箱やら店やら屋台やらで商売していた売り子たちも店を畳み、商品を片づけて、客たちと同じように家路につこうとしていた。彼はセンナヤに入っていた。人とぶつかるのが不快で腹立たしかったが、彼の行く手はまたとりわけ人出の多い方角だった。一人きりになるためならこの世の全てを捨ててもいいくらいだったが、しかし一分たりとも一人にはなれまいと自分で感じていた。人混みの中で一人の酔っぱらいが醜態を晒していた。どうやらしきりに踊りたがっているようなのだが、どうやっても横倒しになってしまうのである。群衆

が男を取り巻いていた。青年は人混みをすり抜けて前に出ると、何分かその酔っぱらいを見物していたが、ふと短く切れ切れの笑い声をたてはじめた。そうして一分もすると、酔っぱらいのことを忘れてしまった。そちらに目を遣りながら、全然見ていないのである。とうとう彼はその場を離れたが、自分がどこにいるのかも覚えていなかった。しかし広場の中央まで来たとき、彼にひとつの衝動が生じた。あるひとつの感覚がたちまち彼を捉え、全身を包み込んでしまったのだ。体も心もそっくりと。

彼は広場のまん中にひざまずき、地に着くまで頭を垂れると、喜びと幸せを覚えながら、その汚い地面にくちづけした。そして立ち上がると、もう一度頭を垂れたのだった。

「見ろよ、こいつしこたま呑んだんだぜ」彼のすぐそばで一人の若者が言った。

どっと笑いが起こった。

「みんな、この人はな、エルサレムに行くんだよ。子供たちに、生まれた国にお別れしてな、世間全体にお辞儀をしてな、首都のペテルブルグとその土にくちづけをしているんだよ」一杯機嫌の町人風の男が付け加えた。

「まだ若い兄ちゃんじゃないか」別の男が口を挟む。

「貴族様のようなぞ」誰かがまじめな声で言った。

「この頃じゃ、誰が貴族で誰が平民か分かるもんか！」

彼はしかし、すっかり人事不省に陥っていたわけではなかった。それは相変わらずうわごとを口走りながら半ば意識を保っているような、熱病の症状なのであった。後になって彼はたくさんのことを思い起こした。ある時は彼のまわりにたくさんの人々が詰めかけて捕まえようとしているらしく、彼のことで議論したり言い争ったりしているような気がした。そうかと思うととつぜん彼はある内庭の門に近いところにいて、すぐそばの塀を見ると、こんな場所の決まり文句で「立ち作業無用」⁴などと書いてある。センナヤ広場脇の舗装道路の小間物屋の前に若い黒髪の手風琴弾きが立っていて、とても感傷的なロマンスを奏でている。彼が伴奏している相手はその前の歩道に立った十二歳見当の少女で、令嬢風にクリノリン・スカート、短いマント、手袋、炎色の羽根の付いた麦藁帽といういでたちである。いかにも大道風に、とぎれはするがたいそう心地よく力強い声で、彼女は屋台店の客がニコペイカを振る舞ってくれるのを期待して、ロマンスを歌っているのだった。青年は二三人の聴衆の隣に足を止め、しばし聞いてから五コペイカを取り出して娘の手に置いた。すると娘は、一番情感のこもった高い調子のところで、まるでぷつりと断ち切るように歌をやめ、手風琴弾きに「おしまいよ！」と強い声で告げた。そうして二人はまたのそのそと、次の屋台店めがけて歩き出すのだった。

「流しの歌がお好きですか？」不意に一人の背の低い人物が話しかけてきた。風体は町人風で、部屋着のようなものをまとってチョッキを着込み、遠くから見た感じはまるで女性のような。油染みた丸棒をかぶった頭はぐっと下に垂れていて、総じて猫背を絵に描いたようである。「私は好きですな」猫背は続けたが、その口調はまったく流しの歌とは別のことを話しているかのようだった。「いいですなあ。寒くて暗くて雨模様の秋の晩に、手

4 「小便無用」の婉曲語法

風琴の伴奏で歌っているなんていうのは。この雨模様というのが肝心で、道行く人がみんなたいそう蒼ざめた、病気のような顔をしているときがいいんですよ。それともいっそみぞれ雪が、それも風がなくてまっすぐに降っているなんていうのもたまりませんな。みぞれ越しに、こうガス灯が光っていてね……」

「いったい何の話ですか？」青年は尋ねた。

町人は彼の方に目をくれなかった。二人はその時十字路にさしかかっていた。

町人は左手の通りへと曲がり、振り向きもせずに進んでいく。青年はその場にたたずんだまま、長いことその後ろ姿を見つめていた。見ていると相手はもう五十歩ほど行ったところできると振り返り、相変わらず立ちつくしたままの彼を見つめた。彼は通りを横切って相手めがけて歩き出したが、しかし相手はまたとつぜんくりともとの方を向いて何事もなかったかのように歩き出すのだった。頭を垂れたまま振り向きもせず、こちらに呼びかけたことなど毛ほども感じさせない。「やれやれ、本当に俺を呼んだのか？」青年はそんなことを思いながら、それでも相手を追いかけて始めたのだった。

「あいつは俺が追いかけているのを知っているのだろうか？」彼は思った。町人はある大きな建物の門に入った。青年はその門に近寄ると、あの町人が振り返りはしないか、また呼びかけはしないかと、じっと相手の様子をうかがい始めた。すると案の定、門の下を通り抜けてもう内庭に出たところで、相手は急に振り向くと、彼に手を振ってみせるような仕草をした。青年の方もただちに門の下を通り抜けたが、内庭に出てみるとすでに町人の姿はない。どうやらすぐ取っ付きの階段口に入ったようだ。奇妙なことに、その階段にはなんだか見覚えがあるような気がした。ほらあれが一階の窓だ。窓ガラスから物憂げで神秘的な月光が差し込んでいる。もうこれは二階。先に行く人物の足音が静まった。「さては立ち止まったか、さもなくばどこかに身を隠したのか？」もう三階だ。先へ進むべきか？ それにしてもあちらはやけに静かじゃないか。こわいくらいだ……。だが彼は先へと進んだ。

あ！ 例の住まいは、階段に向かったドアがすっかり開け放たれている。彼はしばし考えてから入っていった。玄関はとても暗く、がらんとした人気がない。どうやら何もかも運び出してしまったようだ。彼はつま先立ちでそっと客間へと進んだ。その部屋は一面あかあかとした月光に照らされていた。そこは何もかももとのままだった。巨大な、丸い、赤銅色の月が窓から直に覗き込んでいる。「これは月のせいでこんなに静かなんだ。きっと月はいま、謎を掛けているんだ」彼はたたずんで待った。長いこと待っていた。そうして月が静けさを増すほどに、彼の鼓動はますます激しくなり、痛いくらいになった。どこまでもしんと静まりかえっている。ふと一瞬、木っ端でも折ったような、ものの裂ける乾いた音がして、それから再び静かになった。目をさましたハエが一匹、飛び立ちざまに窓ガラスにぶつかって、ぶんぶんと哀れっぽい音をたて始めた。

彼はとつぜん悟った——これは単に例の町人と出会ったことが原因となって、あいつの些細な言葉、ちょっとした目つきに刺激されて、一瞬のうちに猜疑心が怪物のように肥大してしまったのだ……。

「そう、そう、そう！ 心配はいらないよ。時間はある、たっぷりある」町人はそうつぶやきながらテーブルのあたりを行ったり来たりしている。だがその行動には何の目当てもないようで、窓の方へ行くかと思えば事務机の方に向かい、またテーブルに戻るとい

具合。青年の疑わしげな目つきを避けるかと思えば、とつぜん立ち止まって彼をじっと見つめるのであった。

「間に合います、間に合いますとも！……ところでタバコお吸いになる？ お手持ちはありますか？ はいどうぞ、パピロスカです」客に吸い口つきの紙巻きタバコを勧めながら彼は続けた。「自分のことをひとつ貴兄にお話ししておきましょう。いわゆる人物説明というやつです」部屋の主は室内をせかせかと歩き回りながら話を続けたが、相変わらず客と目を合わせるのを避けているような具合だった。「お気づきでしょうか、われわれの所では、つまりわがロシアでは、まだお互いに馴染みは薄いけれども、いわば敬意を持ちあっているような二人の賢い人間が——つまりちょうど私とあなたのような関係ですが——ばったり出会った場合、どうかするとまるまる三〇分も話題を見つけることができずに、互いに硬くなって、間の悪そうな顔つきで座っているんです……。誰だって話題の一つや二つ持っているはずでしょう。たとえばご婦人でも……。コーヒーはお出ししません。場所が場所ですから。でも五分やそこいら友人と腰を下ろして気晴らしをしてもかまわないじゃないですか」部屋の主は一時も黙ることなくしゃべり続けるのだった。

「そこでまああなたにですな、いわば将来の参考として申し上げておきたい——いやいや、私が僭越にも貴兄に教えを垂れようとしているなどと思わんでください。めっそうもない。ただ単に事実として、例として申し上げるだけです。これはさっきあなたご自身が、まったく正確でしかもうがった言葉でおっしゃったことですが（青年にはそんなことを言った覚えはなかった）。どうも話をごちゃごちゃしますな。そこでたとえば、『天の配剤症候群』と呼ばれる病気がありますね。お聞き及びですか？」

「なんと、立派な名前ですね」青年はほとんど嘲りの表情で部屋の主をちらりと見やりながら答えた。

「立派な名前、立派な名前か……」相手はまるで急にまったく別のことに思いをめぐらし始めたような調子で繰り返した。「なるほど、立派な名前ですか！」しまいにはほとんど叫ぶような口調になって客に視線を投げ、彼から二歩の所に立ち止まった。

この延々としたばかばかしい繰り返しの愚劣さは、彼が自分の客に投げかけた真剣で考え深い、謎めいた視線とはまったく矛盾するものだった。

「天の配剤症候群とは何かと言いますと、これにかかった人間は急に、自分の身に起こる出来事が何もかもまさに自分のために設計されたものであり、しかもまさにそこに自分に対する神の配慮が働いていると思ひこむようになるのです。そうした患者は、まあひどく滑稽なことになるのですが、ただし何から何までただの馬鹿話ですむわけじゃない。そう、単純な例を挙げればこういうことです——患者が手に持ったことのあるもの、たとえばそうですね、窓の掛け錠のようなものでもいい、それをあなたが掴むとですね、それでもうおしまい、見事発病予備軍ということになるのです。おまけに何か関連した書物などを読めば、もう大変。雑ばくな言い方をすれば、本日分の摂取許容量オーバーというわけで、いわば自由な芸術的気分になることになる。というかまあ、めでたくあちら側へバイバイと……へっへっへっ……。またひとつ、たとえばこんな場合をご想像ください。あなたが、そうだな、ヴォズネセンスキー通りを歩いていて、歩道の上にエメラルドを載

せた銀の指輪が落ちているのを見つけたとする。これはうれしいでしょう？　うれしがって当然。うれしがるもっともな理由があるのだから。しかしその後で、五六日たってみると、なんだかこう疑惑がわき起こってくるというのでしょうか、きわめて滑稽なことにまた同じ場所に戻って、まったく同じような指輪をもう一度目でさがし始めることになるのです。もう一つ別の例を挙げましょう。ひとつ若い女性を思い浮かべてください。まだ生娘ですが、住んでいるのが部屋というより物置に近くて、歪んだ四角形をしているのです。堀割に面して三つの窓がある壁が部屋を斜めに切り裂いている感じで、そのせいでひとつの角はひどく鋭く奥へ食い込んでいて、灯りが暗いとよく見えないくらい。そのかわり反対の角はみっともないほどの鈍角なのです。そこであなた、どう思われますか。この娘さんはこのような場所に住む運命なののでしょうか？　それとも反対に、神様が彼女に試練を賜っているのでしょうか？

いやあなた、あなたにお考えいただくことは何もありません。これはみなあなたのことを言っているのじゃないし、あなたに関係したことでなくて、ただ私の考えを垂れ流しているにすぎません。こうして開けっぴろげに話すくらいなのだから、つまりは当面あなたを念頭に置いているのじゃない。ただあなたの病気がそう思わせているのです。神経の、神経のなせる業です。それに熱病もかなりなものではないですか。やつらが、つまりあの白っぽくてすばしっこい奴らが、あなたの神経やら骨やらをすっかりむさぼって、内側からあなたの体に穴をあけ、ぼろぼろにしまっているのです。もはやあの方のことしか考えられなくなっているのです。これはあなた、けっして自慢にはなりませんし、立派な名前と呼ぶべきことでもなくて、れっきとした病気です。しかもきわめて伝染性の強い病気で、おまけに病人同士は互いに強く惹かれあい、そうしながら他の人たちを感染させようと狙っているのです。

たとえばですね、こんな詩人がいます。小柄でひよろひよろして、全身これ上流気取りで、いつも首に青筋が浮くほど唇をきつと引っ張っていて、歩くときにくるぶしとくるぶしをチャッとぶつけるような……。こういった、いわば追放の漂泊詩人気取りが、一人ふらりと大道に出て、唇に唇を触れあわせんなどということをつくらむ。するともう一晩中、恐ろしい野蛮な物音がそのあたりから響くことになるのです……。そんなもんだといえはそうだが、それがかまわないとも言えない。そういう場合は物的証拠などというものは省略して、おいこらとがつんとやってしまう。そうして口に一発きついのお見舞いした上で、後は黙って放っておくのです。これはたいそういい気分ですよ、へっへっへっ！　お信じになれませんか？」

青年は返事もせず、青ざめた顔でじっと座ったまま、相変わらずはりつめた目つきで部屋の主人の顔を見つめている。

「良い教訓というわけだ」彼はひやっとしながら考えた。「これはもう昨日みたいな鬼ごっこのまねとは違う。無駄に力を見せつけようとしているのでもない……。そんなことをするほど馬鹿じゃないぞと言いたいんだ……。目的は別だ。でもいったいどんな？　へん、インチキ野郎が、俺を脅かしてペテンに掛けようというのだろう！　そっちには証拠もないし、昨日の男だって存在しないんだ！　しかしどうして、何のためにこれほどまで手の内を開かしてみせるんだ？」

「いやいや、どうやら疑っていらっしゃる。私が罪もない冗談でも言っていると思っ

ているのでしょう」主人はそう言葉を継ぐと、ますます愉快そうな表情で絶え間なく満足げな薄ら笑いを浮かべながら、またもや部屋中をぐるぐる歩き回り始めた。「もちろんあなたのお考え通りで、私は体型からしてもう、ひたすら人にコミカルな印象を与えるように神様があんばいしてくださったわけで。でも真面目なはなし、年寄りの言うことは聞くものですよ（そう言ったとたん、まだ三五歳そこそこの男の姿が、本当にすっかり老け込んだように見えた。声さえも変質して、全身がすっとすぼんだような気がしたのだ）。それに私は開けっぴろげな人間ですから……。ところで私が開けっぴろげな人間かそうでないか、あなたはどう思います？ いやいや十分に開けっぴろげな人間でしょう。だってこのようなことをただあなたにうち明けた上に、何の見返りも求めないのでからね、へっへっへっ」

第3章

そのまま彼はとても長いこと寝ていた。時々目がさめかけたようで、そうしたときにはもう夜更けであると気づいたりもするのだが、起きようという考えは浮かばなかった。そしてついに彼は外が昼間の明るさになっていることに気が付いた。彼は先ほどの昏睡のせいでまだ身を硬直させたまま、ソファに仰向けに横たわっていた。通りからは恐ろしい、身も世もないような叫び声がびんびん響いてくるが、これは毎夜毎夜二時過ぎになると窓の外から聞こえてくる声であった。その声が今も彼の目をさまさせたのである。「ああ、もう酔っぱらいたちが酒場を出ていく時間か」と彼は思った。「二時を回ったんだ」そこで、まるで誰かの手でソファから引き剥がされたように彼は起き上がった。「何だって！もう二時過ぎ！」彼はソファに座り、そこで全てを思い出した。とつぜん、一瞬のうちに全てを思い出したのだ。それから長いこと、何時間にもわたってずっと「今すぐ、一刻の猶予もなくどこかへ行ってしまおう。早く、早く」という声が間歇的に聞こえてきた。彼は何度かソファから身をもぎはなそう、立ち上がろうと試みたが、すでにそれができなかった。最後に彼の目をさましたのは、ドアのノックの音だった。

彼が素早くそちら振り向くと、果たして本当にドアが開き掛けていた。しかもさっき彼が想像したとおりに、静かに音もなく開き掛けていたのだ。彼は叫び声をあげた。長いこと誰の姿も見えず、まるでドアがひとりでに開いたかのようにであったが、とつぜん敷居の上に、何か不思議な人影があらわれた。暗がり目で目を凝らしてみると、誰かの目がじっとこちらを真剣に窺っているのだった。寒気が彼の五体を駆け抜けた。恐ろしいことに、彼はそれがあの娘だということを見て取った。

彼女はまるで中に入るのがこわいかのように、のろのろとゆっくりドアを開いた。姿を見せると敷居の上に立って、長いことびっくりしたように、まるで茫然自失といった表情で彼を見つめている。そしてついに静かにゆっくりと二歩前に出ると、いまだ一言も発せぬまま彼のすぐ前に立った。彼は相手を間近に観察した。それは十二か十三くらいの少女で、背は低く痩せていて、まるで重病の病み上がりのように顔色が悪かった。その分だけ大きな黒い目がきらきら光って見える。古い穴だらけのプラトークを左手で胸に抱えるようにしているが、それはいまだに寒さで震えている胸をくるんできたものだった。二人はそうして互いを観察しあいながら、二分間ほどじっと立ちつくしていた。

「おばあさんはどこ？」とうとう少女は、胸か喉を痛めているような低いしゃがれ声で質問した。

「おばあさん？ だってばあさんは死んだじゃないか！」この質問にまったく備えていなかった彼は、とっさにそう答えてからすぐに反省した。少女は一分ばかりもとの姿勢のまま立っていたが、それから急に全身を震わせ始めた。しかもそれは何か危険な神経発作症でも持っているのではないかと思わせるほどの、激しい震えであった。何分か後には少女の具合は良くなったが、しかし自分の動揺ぶりを彼にみせまいと、不自然なほどの努力を払っていることがはっきりと見て取れるのであった。

「教えてくれ、名前はなんていうんだね？」

「だめです……」

「何がだめなんだ？」

「だめです、全部だめです……名前などありません」とぎれとぎれの怒ったような口調でそう言うと、少女は立ち去ろうという素振りを見せた。

彼は彼女を引き留めた。

「どうだい、これからも来てくれるかい？」

「できません……いや分からない……来るかも」葛藤と逡巡をあらわにして彼女はつぶやく。その瞬間、不意にどこかの掛け時計の鐘が鳴った。少女はぎくっとして、何とも言えぬ病的な悲しみの表情で青年を見つめてささやいた。「何時ですか？」

「きっと十時半だろう」

彼女はびっくりして叫んだ。

「どうしましょう！」そう言うと少女は駆けだそうとしたが、青年はドアのところで彼女を引き留めた。

「ちょっと待ちなさい」彼は言った。「何を恐れているの？ 時間に遅れたのかい？」

「ええ、ええ、わたし黙って出てきたの。放して！ わたし、ぶたれるわ！」どうやら口を滑らせたと思った少女は、必死に叫んで彼の手を逃れようとした。

「いいかい、暴れるんじゃない。お前の家は分かっている。ぼくもその近所に用事があるんだ。ぼくも遅れそうだから、辻馬車を雇うつもりだ。一緒に行かないか？ 送っていくよ。歩くより速い……」

「うちへ来てはいけません、だめです」少女はいっそう怯えたように叫んだ。この男性がもう一度彼女の住んでいる場所へ来るかもしれないと思っただけで、なにやらひどく怖じ気づいてしまい、顔かたちさえ歪んでいた。

「言ったじゃないか、自分の用事で出かけるんで、君のところへ行くんじゃない。後を付けていったりしないよ。馬車でささっと行こう。さあ行くよ」

とうとう彼らはK通りまで乗り付けた。彼女はじっと見つめていたが、それから不意に祈る口調で青年に向かって言った。

「どうかお願いですから、わたしの後を追わないでください。わたしはまた伺います、きっと。機会があり次第、すぐに伺いますから！」

そのまま通りを何歩か進ませたところで青年は馬車を乗り捨て、来た方向に振り向くと、素早く通りの反対側に渡った。彼女はたいそう早足で歩いてはいたが、まだたいして遠くまで行ってはおらず、しょっちゅう振り向いてはちょっと立ち止まるようにさえして、後を付ける者がいないか丁寧に確かめていた。だが青年は身を隠していたので彼女には気づかれなかった。

あらがいがたい説明不能な願望が彼を引っ張っていった。彼は建物に入って門の下を通り抜け、それから最初の右手の通路を通過して馴染みの階段を四階まで上り始めた。狭くて急な階段はひどく暗かった。彼は踊り場に来るたびに立ち止まり、興味深げにあたりを見回した。一階の踊り場では、窓から窓枠がそっくり外されていた。「昨日はこうじゃなかった」と彼は思った。二階の住宅にやってきた。「ちゃんと閉まって、ドアが塗り替えてある。誰かに貸し出されるんだな」それから三階……そして四階……。「ここだ！」だが彼は不審の念に駆られた。その部屋のドアはすっかり開け放たれ、中に人がいて話し声がする。こんなことは予想だにできなかった。しばしためらったあげく、彼は最後の何段かをのぼってその部屋に入っていった。

その部屋もまた新たに改装中で、中に職人たちが入っていた。それが彼を驚かせたようだった。あのとき出ていったままの状態の部屋を見ることになるかと思っていたのである。それが来てみれば裸の壁で、家具はひとつもない——なんだか実に奇妙だ！ 彼は窓辺に近寄り、窓敷居に腰掛けた。

職人は二人きり。ともに若い者で、一方がすこし年上、もう一方はまだごく若かった。彼らはちょうど壁紙の作業中で、ぼろぼろで汚れた以前の黄色いやつを、薄紫の花模様を散らせた白い壁紙に張り替えている。青年にはなぜかそれがひどく気に入らなかった。こんなに全てが変えられてしまうのを惜しむかのように、彼はその壁紙を憎々しげに見つめていた。

彼は立ち上がって、以前に棺が置かれていた部屋へと進んだ。その部屋は今ではひどく小さく見えた。壁紙はもとのままで、片隅の壁紙には聖像入れの置かれてあった跡がくっきりと残っていた。

青年は玄関口へ出ると、呼び鈴の紐を掴んでぐいと引いた。同じ呼び鈴、同じブリキの音がする！ 彼は二度三度と紐を引き、耳を傾けながら記憶を呼び覚まそうとした。つらく恐ろしい、何とも惨めなあのときの感覚が次第に鮮やかに生き生きと思い起こされてきて、彼はひと引きごとにびくりびくりと身を震わせたが、それがだんだんいい気持ちになってくるのだった。

「さて、今度はどこへ行く？」舗装道路の十字路のまん中にたたずんでそんなことを考えながら、青年はまるで誰かから最後の言葉を聞こうとするかのようにあたりを見回していた。だがどこからも何ひとつ返事は帰ってこない。ものみなが聳して死に絶えたようであった。ちょうど彼の踏む石ころたちが彼にとって、彼のみにとって死んでいるように……。とつぜん二百歩ほど離れた遠い通りの突き当たりに、深まる闇を通して、彼は群衆の姿を見分け、人声を、叫びを聞き取った。群衆のただ中にはどこかの乗用馬車が見える……。通りのまん中に火の手が上がった。

彼はこの騒擾をあとにして、ほとんど駆け出すようにその場を離れた。アパートの方に曲がろうとしたが、しかしふと家に帰るのが厭でたまらなくなった。あのアパートの片隅、あの忌まわしい戸棚のような空間の中で、もう一月以上もこの全てが熟してきたのだ。そこで彼は足の向くままに歩き出した。

そうして彼はワシーリエフスキ島を突っ切り、小ネヴァ河に出ると、橋を渡って島の方へ曲がった。都会の塵埃や石灰や、人を圧迫し押し潰すような巨大な建物を見慣れた彼の疲れた目には、草木の緑と新鮮な空気がうれしかった。ここには蒸し暑さも悪臭も酒場もない。ときおり彼はどこかの緑に囲まれた別荘の前に立ち止まっては生け垣を観察し、遠くのバルコニーやテラスの上にいる普段着の婦人たちや、庭を駆け回る子供たちを眺めた。特に気に入ったのは花で、他の何より長くしげしげと見つめていた。男性や女性を乗せた豪華な四輪馬車も通りかかった。彼は好奇の目で乗客たちを見送っていたが、相手が視界から消える前に、もう忘れていたのだ。

ベンチをさがしているうちに、彼は二十歩ほど先を歩いている一人の女性に気づいたが、最初は何の注意も払わなかった。たとえば家へ帰るときでも、自分が通ってきた道をまったく覚えていないことが何度もあったが、彼はそんな風に歩くことになれていたのである。しかしいま前を歩いている女性には、何かすぐに目に飛び込んでくるようなたいそう奇妙なところがあったので、徐々に彼の注意は相手に引きつけられていった。それもはじめは不承不承、腹立ち半分だったのが、後にはぐいぐい引き寄せられていたのだ。彼はふと、その女性のどこがいったいそんなにおかしいのかはつきりさせたくなくなった。第一に、あんなまだうら若い娘が、このような炎暑の中を帽子もかぶらず、傘も差さず、手袋も無しで、なんだかおかしな風に手をひらひらさせて歩いていることだ。彼女の着ているのは絹の薄地のドレスであったが、その着方もまたずいぶん奇妙で、ボタンはきちんとかかかっていないし、ウエストの後ろの部分、ちょうどスカートの始まるところが引き裂かれていて、破れ残った布がひと切れ垂れ下がってぶらぶら揺れている。おまけに女性は足下もおぼつかなく、しょっちゅうつまずいたりあちこちによろめいたりという始末だった。ベンチにたどり着くと、彼女はいきなりその片隅にどさっと身を投げ、たぶん疲れ切っているのだろう、背もたれに頭をもたせて目を閉じた。どうやら意識がもうろうとしているらしく、片足をもう片方の足に載せたが、足の組み方はずいぶんと大胆すぎた。あらゆる点から見て、自分が往来にいることもよく分かっていないらしかった。

十五歩ばかり脇に離れた所に一人の紳士が立ち止まったが、どうやら明らかにこの人物も、何らかの目的を持ってこの娘に近づきたくてたまらぬようであった。その魂胆は明白だった。この紳士は三十歳か四十歳見当、でっぴりと太って血色がよく、ピンクの唇に口ひげ、たいそうしゃれた身なりをして、幅の広い白い顎髭を生やしていた。青年はいったん娘をおいて紳士に近寄っていった。

「おい、スヴィドリガイロフ君！　ここに何の用だね？」泡を浮かべた唇で薄笑いしながら彼は叫んだ。

「あなたに用があるのです」相手は彼の手をつかんで叫んだ。「あなたのところへ行きましょう」

「そもそもわたしはお別れに来たのです」スヴィドリガイロフは慎重に敷居をまたぎ、後ろ手にドアを閉めてからこう言った。

「何という戯言を！ そんなはずがないでしょう」疑いに駆られた部屋の主は、とうとう声を出して言った。

だがこんな非難の声も、客にはまったく蛙の面に水という感じであった。これが何かを決意した人間であり、かつ抜け目のない人間だということは青年にも明らかだった。しかし何かは彼にはおかしく感じられたのだ。

「流しの歌がお好きですか？」彼はとつぜん客に聞いた。「知っていますか、寒くて暗くて雨模様の秋の晩——雨模様の晩に限るんですが——手風琴の伴奏でうたう歌がどんなに良いかということ？」

「ええ」素っ気なく、いささか高飛車なニュアンスを込めた調子で客は答えた。「雨模様というのが肝心で、道行く人がみんなたいそう蒼ざめた、病気のような顔をしているときですね。それともいっそもぞれ雪が、それも風がなくてまっすぐに降っているなんていうのは？ みぞれ越しに、こうガス灯が光っていて……口、目、髪を彩色したバロック風彫刻（白い石膏に赤、黒、青）、ドライフラワーの花輪、それに暗赤色の椅子のフラシ天、そのほかオペレッタに出てくるような贅沢品、暗い横町、＜プチ・パール＞商店街、窓の光に色づけられた孤独な犬、辻馬車は冷え切ってしまい、ギャラリーの壁から石膏の魚の頭（眼窩の中でガスバーナーが燃えている）が突きだしている。流しの音楽に付き物なのは、手風琴、ドアのきしり、足音の響き……。でもいまはそれどころじゃない。いまわたしはアメリカへ行こうとしているのです」

「アメリカへ？」青年は不意にげらげら笑いだした。「でもいったいどうしてアメリカなんですか？」

「でも、もしあそこにいるのが蜘蛛とか何かその種のものばかりだったとしたら？ わたしたちはアメリカを何か理解しきれない理想として、何かとほうもなく巨大なものとして考えがちだ。でもなぜ必ず巨大なものでなくてはならないのか？ もしひょっとして巨大なものかわりに、たとえば田舎の風呂小屋のような煤だらけの部屋がひとつぽつんとあって、隅々には蜘蛛の巣がいっぱい張っている、それがアメリカだと言われたらどうでしょう。わたしにはときおりそんなようなものが目に浮かぶのです」

「いったい、いったいあなたの頭にはもっと慰めになるような、もっと筋の通った考えは浮かばないんですか？」部屋の主は病的な感情のこもった声で叫んだ。

「もっと筋の通った考えですか？ さあどうでしょうね、浮かぶかも知れませんよ」スヴィドリガイロフは曖昧な笑みを浮かべて答えた。「でももしあなたにご自分の質問の意味が分かっていたらな」彼は急に大声で付け加えて、にやりと笑う。「彼女は移り気で、わがままで、おてんば少女特有の辛辣な優美さにあふれていました。彼女は頭の天辺から足の先まで、たまらないほど魅力的でした——髪につけるお仕着せのリボンやヘアピンに始まって、形の良いふくらはぎの下部、ちょうど白いウールのソックスのすぐ上の所にある小さな傷に至るまで。彼女はかわいらしい更紗のドレスを着ていました。ピンクの地に濃いピンクの格子が入っていて、袖は短く、スカートは広く、胴はきゅっと締まっている。さらに彩りの仕上げとして、彼女は唇に鮮やかな紅をさし、片手には巨大で陳腐な、エデンの園を思わせる真っ赤なリンゴを持っていたのです。彼女がソファのわたしの隣に腰を

落として（スカートがふわっと広がり、ゆっくり下りていきました）そのつやつやした果実をもてあそび始めると、わたしの心臓はまるで太鼓を打つように高鳴り始めたのです。

そのころにはわたしはもう狂気と紙一重の興奮状態でした。そこでちょうどその年に流行っていた下らぬ歌の文句を、少し変えながら朗唱し始めました——おお、カルメン、愛しいカルメンよ、思い出しておくれよ……あのギターを、バーを、ライトを、太鼓を……というわけで、口任せのでたらめ文句ですが、言い換えたりひねったりしながら、いわば独特な舌足らず言葉の魅力によって、わたしは**わが**カルメンを魔法にかけてしまったのです。そうしながらも絶えずわたしは恐れていました——不意に何かの天変地異がじゃまに入って、わたしが全存在を集中してその感触を味わおうとしている宝物をうばいってしまったはいらないかと。そんな畏れのせいで最初のうちわたしはあまりにも仕事を急ぎすぎたので、意識的な快樂のリズムを乱しがちでした。ファンファーレとファーラ（ライト）とか、タラバール（おしゃべり）とバール（バー）などが次第に彼女によって言い換えられました。合いの手を入れる彼女の声わたしの選んだモチーフを修正していくのです。彼女は音楽のセンスがあり、リンゴの甘美さに満ちていました。わたしの生きた胸を横切る形で伸ばされた彼女の両足がもじもじ動くので、わたしはそれを撫でてやりました。

そんな風に彼女はソファのわたしの右手に半ば横たわる形で身を沈めていました。短い白いソックスをはいたこの小学生が、太古の果物をむさぼりながら、その果汁に潤んだ声で歌い、スリッパを落とし、くるぶしからずれ落ちるソックスにくるまったかかとを、ソファのわたしの左手に積んである古い雑誌の束にこすりつけている——そうしたひとつひとつの動き、ひとつひとつの擦れや揺れが、造化の神秘と造化の戯れとの間の、わたしの内でもがく野獣と純潔な更紗のドレスにくるまったこの繊細な体の美との間の、秘密ながら確かに感じられる相互関係を、隠しつつ完成させるのに手を貸してくれたのです」⁵

スヴィドリガイロフは我に返ると、椅子から身を起こして窓のに歩み寄った。手探りで真鍮の掛け金を見つけて窓を開ける。真っ暗な小部屋に激しい勢いで風が流れ込み、彼の顔にもシャツ一枚の胸にも一面に、冷たい霜のようなものを吹き付けた。身をかがめて窓敷居に肘を突いた格好で、スヴィドリガイロフはすでに五分ほどもじっとこの靄を見つめていた。その時闇と夜を貫いて大砲の轟音が響き、さらにもう一発が聞こえた。

「おや、警報だ！ 雨で増水しているんだ！」彼は考えた。「明け方には、低いところでは街路が水浸しになり、地下室も穴蔵も水に浸かって、地下のネズミどもが浮き上がってくるだろう。そうしてみんな風雨の中で悪態をつきながら、ずぶ濡れになって自分たちのがらくたを上階に引っ張り上げるのだ……。ところでいま何時だろう？」彼がそう思ったとたん、どこか近くで柱時計が、精一杯急いでいる風にカチカチいいながら三時を打った。「おや、じゃあもう一時間もすると明るくなるな！ なにを待っていることがあるんだ？ 今すぐ出かけて、まっすぐペトロフスキイ公園に行こう。あそこのどこかで大きな茂みを見つけるんだ。雨をいっぱい含んでいて、ちょっと触っただけでも無数のしずくがざっと頭に降り注ぐような茂みを」

彼は窓を離れてかんぬきを掛けると、チョッキを着込み、帽子をかぶって外に出た。

⁵ V. ナボコフ『ロリータ』1部13章の引用。他にも同作品の部分引用が点在している。

「絶好の機会だ、これほどの好機は見つからないぞ！」

いまや部屋の中には別の人物がいる。どこからか、きっと台所からであろう、一人の男が入ってきた。まだ二七歳ばかりの若者で、よい身なりをし、青ざめた、いくぶん濁ったような色合いの顔に輝きのない黒い目をしている。

「茶はどうです？」彼は尋ねた。「煎れ替えたところです」

「えっ？ ああ………本当に……。いやどうも………」

「お飲みなさい。タバコをたくさん吸われるから窓を開けましょう」

「ひょっとして空腹では？ もっとも何もありませんが」

「食べるもの？ いや、いりません」

「彼の言うことを聞きましたか？」

「彼？ いや、ぼくは遅れてきたんで。彼なら知っています。あの連中の言うことはいつも同じです。覚えています」

「あなたは？ 違うことを言うの？」

「違うこと？ いや、どうして。ぼくは喋りません。喋る理由がない」

「教えてください、あなたはあのとき真面目に言ったのですか？ ひとつの思想があって、それ以上は何もないって。ぼくには大事なのです」

「大事なのは分かります。誰にとっても大事です。思想がひとつだというのは、その通りです。不幸な人間たちは、自分が幸福だということを知らないゆえに不幸なのです。自分が快適だと気づきさえすれば快適になれるだろうに、それに気づかないでいる間は、ずっと不快なのです。悪しき人間とは、自分が善き人間だと気づかない人のことです。まあ、そういうことです」

「それで他には何もない？ そんなに簡単なものなのですか？」

「もちろん、ただの単純な事実ですから」

「それにしても貧弱すぎませんか？ ひとつの思想だけあって、それっきりとは」

「違います。小さい思想がたくさんあると、かえって貧弱なのです。大きな思想がひとつならば、貧弱ではありません」

「でもそこから多くの幸せが得られますか？ だいたいそこにどんな幸せがあるんです？」

「あなたがお考えのような幸せではありません。そのような幸せはあったためしがないのです。あるのはひとつの事柄であって、幸せは関係ありません」

「いったいそれが良いことなんですか？」

「良いことです、確かに。幸せがないのは良いことです。幸せがなければ不幸もない。そのようなものは全然存在しない。あるのはまったく別のものです」

「しかしそれほど簡単だと、退屈で首をくくりたくなるでしょう」

「それは良くない。あなたは退屈してはいないでしょう。腹が立つというのは、つまり認めていらっしゃるからだ。でも同意するのがこわいのです。なぜなのですか？」

「わたしが弱い人間だとおっしゃりたい？」

「いいえ。でもあなたは怖がっている」

「何を？」

「存在しないものをです。行きましょう、彼女があなたを待っています」

「彼女って？」

「夜の女王です。怖がってはいけない。怖がるべきものなんて何もないのです」

相変わらず彼は小声でゆっくりと、なんだか変に物思わし気な様子で話していた。彼らは部屋に入った。部屋の中はとても暗かった。夏のペテルブルグの「白夜」もさすがに暮れ始め、仮に満月でなかったなら、ブラインドをおろした部屋の中では何かを見分けることは困難だっただろう。だがもう暗がりにも目が慣れてきた青年は、寝台があるのを見分けることができた。寝台の上には誰かがじっと身動きもせずに寝ている。かすかな息づかいさえ聞こえなかった。眠る人は頭からすっぽりと白いシーツにくるまっていたが、体の線はぼんやりと分かる。起伏の様子から、体を湾曲させて寝ているのだけは見て取れた。

あたりは散らかしっぱなしで、寝台の上にも足下にも、寝台脇の肘掛け椅子や床の上にさえ、しわくちゃになった着衣、豪華な白絹のドレス、花束、リボンといったものが散乱していた。足下のあたりにはレースの切れが皺になっていたが、掛けシーツの下から白々と見えるそのレースの上に、むき出しの片足の先がのぞいていた。それはまるで大理石でできたもののように、恐ろしいほどにじっと動かなかった。じっと見つめていた青年には、見つめれば見つめるほど部屋の中に死の気配と静けさが満ちていくのを覚えていた。とつぜん目覚めたハエがぶんぶん羽音を立て、寝台の上を飛んでいって、枕元のあたりで静かになった。

「どう」不意に少女は言った。周囲の暗がりの中で大きな黒い目が輝いている。「約束したとおりに来たわ。心配いらないわ。時間はあるから」彼女はにっこりと笑うと、ゆっくりと腰のあたりまでシーツを脱ぎ、背中にまくらをあてがって寝台の上に座った。「あなたに話があるの。それは……」彼女は考え込んだ。「そうね、シューシャのことよ。シューシャというかシューシというか、まあどっちでも同じよ⁶。別の呼び方をしてかまわない。とにかくシューシャについて昔から知られてきたのは——それが乾いていること、それから硬くてほとんど曲がらない紙、たとえば羊皮紙のようなものの上に、びっしりと細かく罫線が引かれているようなものだということよ。それがまるで六月のコオロギのように乾いた音を立てるの。

でもそれはただむかしシューシャが乾いていたというだけのことで、後になるといろいろな風にかわってきたの。乾いたのも湿ったのも何でもあるわ。だからシューシャがどんな風に振る舞い、どんな風に扱われてきたかを知らなければ、結局何も分からないわ。

むかしはシューシャはとても大きな、というか巨大なものだったの。大きな岩でできていて、周りにこけが生えても平気、遠くからでも一目で見えるほどの大きさと、下の地面がたわんでいたそうよ。だから寄りかかることもできたの。ただ草で服を汚しながら寄

⁶ シューシャ(shusha)ないしシューシ(shush)の含意は不明だが、「タイプライター」(pishushchaia mashina)などの語を形成する「書く(ための)」(pishushchii)という形容詞(形動詞)と音の一部を共有していることと、これ以下のイメージ展開(羊皮紙、罫線等々)から、これを「文学」の比喩と取ることもできそうである。その場合、作者はこのパロディ小説の最後に、文学の歴史的生態に関する寓話を置いたと考えることができる。

りかかって、目のおもむくまま、どこか遠くの方を眺めているの。それでそうして立っていた人がみんなひとかけらずつこそぎ取っていくようになったので、シューシャはバラバラに分割されていったのだけれど、でもそのかわり一度にたくさん場所にあるようになったのね。

だいたいシューシャはとても分かりにくいし、いまでは手に持つこともできない。もうさんざん細かくされてしまったので、まるでピラミッド積み木のとっぺんのように、ぼろぼろ頭の上に落ちてくるの。だからシューシャがどんなものかはっきり言うことは永遠にできないわ——だってむかしはこれこれで、いまはこうなるとしか言えないんだから。

時々細長いシューシャもあるけれど、手に持てるほどじゃないし、他にも黄色をしているのとか、暖かいのとか、棘のやうにとがっているものもある。うじゃうじゃたくさんあるときもあれば、とっても少ないときもあるの。かけらを丸薬のやうに丸めて、気分が良くなる薬として誰かに投げてやることもできる。むかしはよく透き通っていて、まるで向こう側の景色がついた窓ガラスみたいだった——すべすべした緑色や、鮮やかな純白の、まるでオランダイチゴの実のやうな小さな花模様が透けて見えるの。それが時には暗がりを楽しんで、まるで線路脇の踏切番が手に持っている赤信号のやうなものに化けるの。

だいたい、いまの人々がシューシャを見ようとしないうし、シューシャが何かも知らないのはよくないことね。だって、戦っているひとはみんな、実はシューシャを自分のものにしようとして戦っているのだけれど、シューシャを独り占めにすることなんて不可能なのよ。でも人々は何も知らないし理解もしないの。

まだ世の中がもっと単純だった頃は、シューシャは硬い紙の上を指で転がすと気持ちのいい水銀の滴のやうなものだったり、色ガラスを抜けてくる光のやうなものだったりした。でもいまどき金の渦巻き文様なんてどこにある？ クジャクの羽根やすべすべした銀はどこにある？ 噴水のせせらぎは、もはや私たちの心を高揚させてくれるのじゃなくて、ただ夏の暑気払いにしか人気がないのはなぜ？ 割れたガラスや寂れた裏庭や、そういったものがいま私たちを引きつけるのはなぜ？ みんなこのせいよ。

きっと誰かがシューシャを発見して、何か特別のものの中に入っていなければならないという義務から解放したのね。それをした人はたぶん……わたし知らないわ。

シューシャはもう完全に自由の身だから、どこで見つかるかも、どこで失うかも分からない。むかしは外から見えたけど、いまでは中に入ってしまったから、昔のものは全部おしまいになって、いまの新しいものはすっかり別のやうになったの。もういつでも遍在しているから、窓の外景色の姿をとって私たちにのしかかってくることもできるわ。例えばくねくねした揚水機と、キログラム1ルーブリもしないやうな可燃物や他の物質がしまわれているスレートで囲われた倉庫がある、そんな景色となってね。あなたがたは完全に自由よ。だから行きなさい。あなた方は自由、みんな自由、授業はおしまい、全部おしまいよ。さようなら」

テキスト： Андрей Левкин. «Достоевский как русская народная сказка» А. Левкин. *Двойники*. СПб.: Борей-Арт, 2000. Стр.19-57. <<http://www.vavilon.ru/texts/prim/levkin1.html>>

(望月哲男訳)